西アフリカ・トーゴ共和国における人道的支援活動について

奨励	金岡　保之〔かなおか・やすゆき〕
奨励者紹介	宮崎大学地域資源創成学部准教授

正義を洪水のように
恵みの業を大河のように
尽きることなく流れさせよ。

（アモス書　５章24節）
今出川校地チャペル・アワー

「あなたがたもこのように働いて弱い者を助けるように、また、主イエス御自身が『受けるよりは与える方が幸いである』と言われた言葉を思い出すようにと、わたしはいつも身をもって示してきました。」

（使徒言行録　20章35節）
京田辺校地ランチタイム・チャペル・アワー

１．はじめに

私は、宮崎大学地域資源創成学部准教授であり、また一般社団法人日本トーゴ友好協会の会長をしています。同志社大学では、ビジネス研究科と総合政策科学研究科で５年間学びました。その後２年間、同志社大学国際教育インスティテュート嘱託講師として、留学生に「京都の企業と産業（Corporation and Industry in Kyoto）」の科目を教えていました。

本日は、母校のチャペル・アワーでお話しできることを光栄に思い、心から感謝いたします。さて、本日の私のメッセージは「西アフリカ・トーゴ共和国における人道的支援活動について」です。

皆さんは、トーゴ共和国という国名を聞いたことがありますか。

私が、２０１１年に日本トーゴ友好協会（以下「協会」という）を立ち上げるまではトーゴ共和国のことや、アフリカのことはほとんど知りませんでした。インターネットでトーゴと検索しても、日本海軍の「東郷平八郎」と出る程度で、ほとんどトーゴ共和国の情報はありませんでした。

トーゴは西アフリカの中央部に位置し、ギニア湾に面した小国です。広さは日本の７分の１ほどで、南北に細長い国土。人口は約７５０万人で、公用語としてフランス語を話します。季節は雨季と乾季があり、豊かな自然が残っています。また、トーゴの国民性は穏やかなので、「アフリカの笑顔（Smile of Africa）」の愛称で知られています。

２．これまでの活動

これまで協会は、細々と活動してきました。主に日本国内ではトーゴの広報活動をし、トーゴでは人道的支援活動をしています。例えば、学校への図書寄贈や、村の使えなくなった井戸を修理する活動などです。

２０１３年に、私は初めてトーゴを訪問しました。主な目的は、首都ロメから車で30分くらい走った村の井戸を修理して、７００人余りの村人に安全な水を供給することです。

村の子供たちは、毎日片道１時間以上歩いて、池の水が入った容器を頭の上に担いで村まで運びます。綺麗な水ではないのですぐに病気になりますが、他に水はありません。また、子供たちは水汲みのために満足な教育が受けられないことを知って、私は「良心」が痛みました。

池で、子供たちが白く濁った水を一生懸命汲んでいる姿を見て、私を案内してくれた現地のスタッフに“Do they drink this water?”と聞くと、“Yes, they drink this water.”と返答が返ってきました。その時の声と映像が、今も私の脳裏に焼き付いています。

滞在して一週間後、現地のボランティア・スタッフたちが井戸の修理を終え、７００人余りの村人たちに安全な水を供給することができました。すると村人たちは、伝統的な踊りと、歌や楽器の演奏で感謝の意を表し、私たちも最後は一緒に踊りました。その時私は、帰国してもこの活動を続ける決意をしました。

豊かな日本で生活していると、水や電気が限られたトーゴの生活は、私にはとてもできません。しかし、彼らにとってその生活は当たり前の日常なのです。チャペル・アワーの秋学期統一テーマは、「受けるよりは与える方が幸いである」です。私にとって、この言葉はピッタリだと思います。

私が２０１５年に宮崎大学に赴任するために宮崎に来て、協会の活動に大きな変化がありました。まず、協会を大学研究室内に設置しました。そして、２０２０年の東京オリンピック・パラリンピックの開催です。協会が、宮崎の日向市東郷町にトーゴ大使を招待するなどの活動が実り、２０１８年12月に宮崎県日向市がトーゴの東京オリンピック・パラリンピックにおけるホストタウンに登録されました。ホストタウンとは、日本の自治体と、２０２０年東京大会に参加する国・地域の住民等が、スポーツ、文化、経済などを通じて交流し、地域の活性化等に活かしていくものです。

宮崎のメディア各局は、こぞって「トーゴが、東郷で、意気投合」と報道しました。協会は、日向市、内閣官房オリンピック・パラリンピック競技大会推進本部事務局、宮崎大学金岡研究室と共働して活動しています。今年の３月には、国の資金でトーゴからオリンピック選手候補者やダンサー、および東京のトーゴ大使館関係者ら５人を招待して、大学の学生たちや日向市民らと交流する国のモデル事業を行いました。５人のトーゴ人は、アフリカの笑顔と言われるだけあって、地域の人たちとすぐに打ちとけ合い、楽しい時間を共有しました。

また、８月には横浜で開かれた第７回アフリカ開発会議（TICAD７）のサイドイベントとして「アフリカ・ホストタウンイベント」に参加するなど、様々な人々や団体と連携して大きな活動となりました。

３．活動を改めて考える

今回このような機会をいただき、改めて聖書を私なりに解釈して、活動にどのような意味があるのかを考えました。

（先ほどの）アモス書５章24節には、「正義を洪水のように／恵みの業を大河のように／尽きることなく流れさせよ」とあります。

「正義を洪水のように」では、

人道的支援活動には、「地域ニーズ」の把握がとても重要です。こちらで勝手に考えた支援を押し付けるのではなく、現地に行って本当に必要な支援を探り、現地の人たちと交流しながら支援活動を進めます。また、小さなことでも「正しい」と思うことを絶え間なくやり続けることも重要です。何が正義なのかを考え、地域で本当に必要とされている物や事を支援することが大切です。正しいことをすると共感する人が集まり、輪が広がるのです。

「恵みの業を大河のように」では、

異文化を理解するためには、交流を通じての「相互理解」が重要です。それぞれの文化や生まれ育った環境は違えども、お互いの交流の中で小さくても「恵み」を与え合うことで、将来は大きな大河のようになります。

交流プロジェクトの最後にトーゴ人の代表者は、「交流を続けたことで、私たちは家族になった」と言ってくれました。小さな活動の積み重ねから始まり、最近は東京オリンピック・パラリンピック・ホストタウン事業のように、より大きな活動に発展しました。

「尽きることなく流れさせよ」では、

国際交流や人道的支援活動には、「持続可能性（サステナビリティ）」が大切です。継続すると、理解が広がり、賛同する人も増えていきます。

東京オリンピック・パラリンピック・ホストタウン事業では、事業が終わった後はおしまいではなく、「レガシーとは何か」を考えます。私は、レガシーとは、支援や交流を続け、その輪を広げていくことだと思います。

アモス書５章24節の「正義を洪水のように／恵みの業を大河のように／尽きることなく流れさせよ」は、「地域のニーズに沿った正しいと思う活動を、様々な立場の人たちを巻き込んで、長く続ける事が活動を広げる上で重要だ」と教えてくれました。

４．むすび

今後は、来年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、トーゴのホストタウンとして、トーゴ共和国独立60周年記念式典を日向市で開催します。オリンピック・トーチリレーや記念植樹など、宮崎で多くの関連イベントを行う予定です。

トーゴの活動を通じて、巨大市場・最後のフロンティアと言われるアフリカの重要性を認識し、トーゴと日本の交流を深めていきたいと考えています。

２０１９年10月29日　同志社スピリット・ウィーク秋学期
今出川火曜チャペル・アワー「奨励」記録

２０１９年10月30日　同志社スピリット・ウィーク秋学期
京田辺水曜ランチタイム・チャペル・アワー「奨励」記録